

# 共同研究の目的と経過

松尾恒一

## 研究目的

唱導文献は、中世の仏教文化の中核を担うテキストとして、儀礼と結びつき、芸能に展開する基盤となり、また、歴史状況と密接に関わり、時代とその人間の心意を象る史料としても高い価値を有する資料である。その研究は、文献学的資料調査と解読分析を基礎として、人文学の諸分野から学際的になされる必要がある。

歴博田中旧蔵文書中の『転法輪鈔』は、中世唱導の主流であった安居院唱導の代表的文献の中で最古最善のテキストであり、金沢文庫寄託称名奇聖教中の安居院唱導文献群に比してはるかに古態をとどめ、それらを位置付ける上で不可欠な伝本である。安居院唱導文献の研究については、『安居院唱導集上巻』（一九七五）以降、大きな進展がみられない。その停滞は、こうした基幹資料が多く未公開であることが影響している。この状況を打開する一步として、歴博本『転法輪鈔』を研究・紹介することは急務であり、その公刊は、歴史・文学および美術史と建築史等の重要資料として学界の求めに応えるものとなる。

加えて、唱導文献を広く宗教テキストとして認識し、特に儀礼テキストとしての普遍性のもとに把えることにより、唱導が担う仏教文化の構

造と体系が明らかになり、ひいては説経や延年など芸能へと展開する実態を明らかにできよう。それらは、仏教が王権や国家と深く結びついた東アジアに共通する現象であり、中国・韓国の仏教儀礼と芸能の研究者が参加することは、そうした広い地平において唱導文献の諸位相を捉える格好の機会となる。また米国の中世仏教に深い知識と新鮮な問題意識を有する研究者の参加も、こうした課題を国際的な視野の許で展開する契機ともなる。

すでに研究代表阿部泰郎は、副代表松尾恒一も加わった共同研究として、科研費基盤研究（B）「中世寺院の知的体系の研究」で真福寺等において唱導文献を含む仏教資料全般にわたる総合的研究を深め、また名古屋大学文学研究科二世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」の推進担当者として、その宗教テキストとしての普遍的構造を追究してきた。さらに、グローバルCOE「テキスト布置の解釈学的研究と教育」（平成一九年～二三年）では、その成果をより高度化して、自身の科研費研究の主題である中世宗教テキストの総合的研究を、国際的な連携を築きつつ展開すべく努めた。本研究はその重要な基盤ともなり、また、これらと連携することによって、より大きな次元の共同研究へ発展させることが期待される。（阿部泰郎執筆）

## 研究経過

### 第一年次 二〇〇八年度

◇第一回研究会 五月一六日 名古屋 真福寺

・真福寺蔵の聖教調査と今年度の研究計画についての討議

◇第二回研究会 六月五日～六日 韓国 ソウル

〔五日〕研究発表 於ソウル Metro Hotel

坂田沙代（ソウル大学校国語国文学科博士課程）「金剛山遊覧と僧

侶の役割」

松尾恒一「奉元寺靈山齋について」

〔六日〕ソウル奉元寺にて靈山齋の調査

◇第三回研究会 六月二〇日 神奈川県立金沢文庫

・金沢文庫蔵の唱導関係を中心とする資料の調査

〔研究発表〕

阿部美香「金沢文庫蔵「上素帖」について」

◇第四回研究会 八月二二日～二三日 国立歴史民俗博物館

・『転法輪鈔』他、館蔵田中旧蔵文書の調査

〔研究発表〕

高橋一樹・内田滯子「歴博蔵田中旧蔵文書について」

康保成「仏典の「謗仏」物語と大足「謗仏不孝」石刻―変文・変相図

と演劇との関係をも視野に―」

◇第五回研究会 一月二九日 新宿明治安田生命ホール

・映像フォーラム「海を渡った仏教 儀礼と芸能」

・報告 阿部泰郎「堂童子と儀礼・芸能」

尹光鳳「韓日仏教儀礼と芸能」

◇第六回研究会 一月二三日～二四日 国立歴史民俗博物館

・歴博蔵『転法輪鈔』ほか、中世唱導関係資料調査

筒井早苗「為小堂供養祈修同供祭文」の考察―『転法輪鈔』中間報

告として―」

牧野淳司「歴博蔵『転法輪鈔』の翻刻と解題作成についての経過報告」

研究会は、第一回（五月）には、名古屋の真福寺において本共同研究の主旨説明と研究計画打ち合わせを行い、大須文庫所蔵の唱導・法儀テクストの閲覧と断簡中の唱導文献について整理と分析を行った。

第二回（六月）は韓国ソウル市に赴いて奉元寺の靈山齋の見学・調査記録と、ゲストスピーカー坂田沙代氏による「金剛山遊覧と僧侶の役割」の発表を中心とする研究会を行った。なお、本研究会には、韓国東国大学洪潤植名誉教授が参加し、活発な討議が行われた。

第三回（六月）は金沢文庫にて特別展『五寸四方の文学世界』を見学し、展示された称名寺聖教中の唱導文献の全体像について、研究分担者の西岡芳文学芸課長からレクチャーを受け、その他重要な唱導資料の閲覧を行った。

第四回（八月）は歴博において、館蔵田中穰旧蔵文書中の唱導・儀礼テクストを中心に閲覧を行い、その内容を検討し、あわせて研究会でその概要について高橋・内田共同研究分担者から説明を受け、研究代表者による中世唱導テクストの体系の試論が提示され、第三回に引き続き阿部美香共同研究員から『上素帖』に関する報告がなされ、本共同研究員である中国中山大学康保成による研究発表が行われた。

また、仁和寺蔵の法儀・声明書について、小島裕子共同研究員を中心

に調査を実地した(九月)。

第五回は、昨年度の民俗研究映像「葉師寺花会式」「春日大社・興福寺の年中行事」を一般公開上映した映像フォーラム(十一月)において、本共同研究の共同研究員(阿部代表・松尾副代表・尹共同研究員)による、報告と討議を行った。寺院の建造に関わる職能者の、行事への奉仕と、大陸より伝播した仏教の、日本と同様に古代以来の歴史を有する韓国の事例との比較討議を行った。

第六回(一月)、歴博において『転法輪鈔』のほか、中世唱導関係資料の調査を行い、また、共同研究員筒井早苗の「為小堂供養祈修同供祭文」の考察」の研究発表が行われ、牧野淳司により『転法輪鈔』の翻刻と解題作成についての進捗報告が行われた。

#### 〔研究成果〕

初年度は、研究対象となる中世唱導文献と儀礼テキストについて、主要な寺院と文庫に伝来・所蔵されている資料の輪郭を把握し、それらの中での歴博蔵田中旧蔵資料の含む範囲や位置を確認した。

その過程で、中心的な研究対象である歴博蔵『転法輪鈔』の本格的な輪読と原稿作成も開始された。

加えて、密接に関連する安居院唱導資料『上素帖』(金沢文庫所蔵)や『安極玉泉集』断簡(真福寺)等の新発見資料の開拓的研究が推進された。

東アジアにおける仏教儀礼、及び、これと深く関わった芸能の伝承の実見・調査として、韓国奉元寺靈山齋の調査を行ったが、密教的作法や、禪宗的な儀礼等との複合、在地の精霊信仰に基づく諸作法等が確認され、中国を経由して伝来した仏教の地域的な定着と展開を考究するうえで、今後、日本の諸事例との興味深い比較が必要となる確信を得た。

#### 第二年次 二〇〇九年度

前年度に引きつづき、歴博蔵、田中旧蔵文書を中心とする中世仏教儀礼関係の資料の調査と、共同研究会を中心とする研究発表、討議を行った。特記されるのは、日本との比較を目的とした中国の仏教儀礼、唱導芸能の調査を実施したこと、及び韓国・中国の専門研究者を招き、公開の国際研究集会を開催したことである。これらを含む、五回の共同研究会の発表者、発表題は下記の通り。

◇第一回研究会 五月八日(金)～九日(土) 国立歴史民俗博物館

・歴博蔵『転法輪鈔』ほか、中世唱導関係資料調査

〈研究発表〉

ゲストスピーカー 三好俊徳「田中穰氏旧蔵『転法輪鈔』からみる源

頼朝の宗教政策」

・歴博蔵『転法輪鈔』の翻刻と解題作成についての経過報告

◇第二回研究会 七月一四日～七月一八日 名古屋真福寺

〈研究発表〉

ブラアン ルバート「奥書・識語が語るもの―中世真言密教祖師自筆

の言説と修法・聖教伝授の関係に関する一考察―」

・真福寺蔵、唱導関係資料調査

◇第三回研究会 九月一八日～二二日 中国、仏教儀礼、唱導関係調査

・天台山国清寺の朝の勤行(朝課)聴聞。及び山内踏査、特に伝教大師関係堂舎・碑等を調査。

・天童寺、禪宗法要(晚課)聴聞・調査。道元禪師関係堂舎・碑の等踏査。

・鎮江金山寺にて水陸法会の調査。特に内壇の莊嚴の調査。現況(施主や催行状況等)と歴史について聞き取り調査。

・蘇州評彈学校にて、校長・作曲家の教師・演奏の教師より、学校の成立、評彈伝習のための課程等について聞き取り調査。  
・蘇州評彈博物館にて評彈を聴聞。評彈とその奏演の空間・聴衆層等について調査。

◇第四回 二月二三日 名古屋大学 文系総合館カンファレンス・ホール  
・名古屋大学との共催による公開の国際研究集会「東アジアの宗教儀礼と表象文化」

・歴博民俗研究映像「葉師寺花会式」行法と支える人々」上映と解説 松尾恒一

・基調講演 洪潤植（韓国東国大学名誉教授）「韓国の仏教儀礼と芸能」

・シンポジウム「東アジアの宗教儀礼と表象文化」

金應起（韓国東国大学教授）「韓国における「靈山齋」の儀礼と芸能及びその歴史」

小島裕子「舍利会における舍利の奉迎について」

荒見泰史「敦煌文献に見られる唱導資料」

コメント 殷勤（杭州仏学院）・尹光鳳・松尾恒一  
総括 阿部泰郎

◇第五回共同研究会 三月九日～一〇日 国立歴史民俗博物館

〈研究発表〉

松尾恒一「古代、延暦寺根本中堂修正会の咒師作法の特質、新資料

真福寺蔵『中堂呪師作法』を中心として」

阿部美香「新資料、金沢文庫蔵『上素帖』の唱導資料の特質

〔研究成果〕

上、研究経過に記した共同研究会により、歴博蔵、田中旧蔵文書の中

心とする中世仏教儀礼関係の資料の調査と、共同研究員を中心とする研究発表、討議を行った。

第一回はゲストスピーカー三好俊徳氏が「田中穰氏旧蔵『転法輪鈔』からみる源頼朝の宗教政策」を発表し、『転法輪鈔』中の二篇の源頼朝主催法会の表白を中心に、儀礼の分析とその歴史的位置づけを検討した。頼朝の宗教政策について、京洛と鎌倉との関わりを視野に入れて、本表の分析を試みた。

第二回は、ブライアンルパートの「奥書・識語が語るもの―中世真言密教祖師自筆の言説と修法・聖教伝授の関係に関する一考察―」の発表が行われた。鎌倉中期以降の、日本密教テキストを資料として、特に奥書・識語―テキストの筆者・書写者・伝来・刊記等の記載―に注目して、古代後期、院や朝廷と結びついた顕密仏教、国家仏教体制下の仏教とは異なる密教のあり方を考究したもので、これらの密教テキストの生成は主に、地方において弟子たちの手によってなされ、その由緒の正しさ、正当性＝正統性を、師匠からの誤りのない伝授によってなされたことを根拠としている点に、注目すべきであるといった内容が発表された。

これ対して、その中世、特に鎌倉期における聖教書写の仏教史上の意義について、阿部代表によるコメントがなされた。また、修法を内容とする多くのテキストが書写されていることは事実として認め得るが、これらの密教修法が、どの程度実践されたのか―実際に行われたのはその一部ではないか―といった指摘、また、これが地方において行われた目的や、これを可能とした経済的基盤は何だったのか、といった問題が松尾恒一より指摘された。さらに、高橋一樹は、地方の中でも、事例が東国に偏向している点に注目すべきで、これは、東国にもう一つの政權、鎌倉幕府が成立し、朝廷―幕府の往還といった、列島内に生じた新たな政治的状況の反映と認め得るのではないか、その場合の中央―東国の結びつきは、ストレートなものではなく、畿内の一地域、あるいは複数

地域を介したものでろうといった指摘がなされた。

第三回研究会は、中国における、仏教儀礼、唱導関係の調査を実施した。特に、日本仏教の歴史と民俗的な展開、また琵琶法師による平曲や説経・講談等、唱導を考究する上で、比較が有効であると考えられる民俗文化の現況について調査を行った。

第一に、古代・中世の日本仏教の祖師らの修行と習得が行われた寺院、及びそれらの寺院における儀礼の時間・空間と身体所作・音声の調査として以下の寺院に赴いた。

- ・天台大師智顛円寂の地、新昌县城大仏寺（元隠岳寺・石城寺、巨大弥勒石仏）の踏査
- ・天台山国清寺にて、法会の歴史と現況の調査
- ・天台山国清寺の朝の勤行（朝課）聴聞、及び山内踏査、特に伝教大師関係堂舎・碑等
- ・天童寺、禅宗法要（晚課）聴聞・調査、道元禪師関係堂舎・碑等、踏査
- ・鎮江金山寺にて水陸法会の調査、特に内壇の莊嚴について、現況（施主や催行状況等）と歴史についての聞き取り

さらに、中・近世芸能の伝承・伝習状況の調査として次の機関を訪れた。

- ・蘇州評彈学校における、校長・作曲家の教師・演奏の教師への、学校の成立、評彈伝習のための課程等についての聞き取り
- ・蘇州評彈博物館にて評彈の実態の調査を実施した。

第四回は、阿部代表の本務校である名古屋大学との共催による国際研究集会「東アジアの宗教儀礼と表象文化」を韓国・中国の研究者を招聘し、公開にて共同研究会を開催した。

東アジアにおける国や地域による差異はあるものの、古代・中世に仏教の実践として、寺院における儀礼が大きな役割を果たし、これを基盤

として特徴のある文化が生成した。その文化生成は、建築・絵画・歌舞・音楽・文学……といった多分野におよび、また地域の民間信仰とも結びついて独自の変容を遂げ、その伝承のいくつかを各国に見ることができると本研究会は、仏教儀礼の古代・中世の実相を明らかにしつつ、仏教を起源、あるいは基盤とする諸文化の生成と定着についての比較を、韓国・中国の専門研究者、及び大学に所属する専門研究者等とともに考究したが、宗派仏教として成立した日本仏教においては、その後の文化生成や展開の上で、韓国・中国とは大きく異なるものとなったこと等が浮き彫りとなり、今後、水陸齋（水陸法会）の比較研究等、個別事例についての比較研究を推進することの必要性が、韓国・中国の研究者とともに共通の認識となった。

第五回共同研究会では、松尾「古代、延暦寺根本中堂修正会の咒師作法の特質、新資料真福寺蔵『中堂呪師作法』を中心として」、阿部美香「新資料、金沢文庫蔵『上素帖』の唱導資料の特質」の研究発表が行われた。いずれも、新資料の紹介・内容分析を中心とする研究発表で、仏教儀礼と密接に結びついた古代・中世の芸能の新たな側面を照射する発表内容で、現行儀礼や中国仏教との相違点等について、活発な討議が行われた。第二年次ではまた、研究対象の核となる館蔵『転法輪鈔』の解説と分析を前進させつつ、館蔵の他の仏教儀礼を中心とする中世の文献資料の調査を実施した。さらに、新出の古代・中世の仏教儀礼・唱導資料の考察も行った。

東アジアにおける仏教儀礼、及び、これと深く関わった芸能の伝承の実見・調査として、中国における仏教儀礼、唱導関係の現行の伝承例を中心に調査を実施した。特に、日本仏教の歴史と民俗的な展開、たとえば琵琶法師による平曲や説経・講談等、唱導を考究する上で、比較が有効であると考えられる民俗文化の現況について調査を行い、東アジア世界における文化比較の上での仏教の重要性、精緻な調査に基づいての比

較の必要性が認識された。

共同研究会のうちの一回は、右に述べたように国際研究会集として「東アジアの宗教儀礼と表象文化」をテーマとして実施したが、韓国・中国の研究者を招聘して討議を行うことにより、その展開・伝承の、日・韓の間の差異を明確にすることができた。なお、本研究会集は公開で開催し、約七〇名の外国人を含む大学教員・大学院生・一般来館者の参加があり、本共同研究の成果と意義を、大学・関係学会をはじめとする研究者コミュニティに発信することができた。

### 第三年次 二〇一〇年度

◇第一回研究会 八月二三日(金) 国立歴史民俗博物館

『転法輪鈔』等、田中旧蔵文書、中近世芸能関係資料の調査

◇第二回研究会 一〇月六・七日 イリノイ州立イリノイ大学 国際研究会集

Religious Texts and Performance in East Asia

東アジアにおける宗教テキストと表象文化

歴博共同研究「中世における儀礼テキストの総合的研究 (the Comprehensive Study of Liturgical Texts of the Medieval Period) — 歴博蔵田中旧蔵文書『転法輪鈔』を中心として—」が中心となり、アメリカ・イリノイ大学、及び阿部泰郎代表科研費基盤研究(A)「中世宗教テキスト体系の総合的研究—寺院経蔵聖教と儀礼図像の統合—」の三者の共催による国際研究会集。開催代表は、日本側は松尾恒一(歴博)、アメリカ側はブライアン・パート(イリノイ大学)。

州立イリノイ大学において、アメリカを中心とする日本、東アジアの宗教・宗教文化の専門研究者とともに、報告と討議を行った。歴博共同研究の中心に据えられている歴博蔵田中旧蔵文書『転法輪鈔』の内容及

資料的価値・意義の紹介、及び、民俗研究映像『薬師寺花会式—行法と支える人々—』(英語版)の上映と討議をおこなった。

アメリカ側からは、前近代の日本・中国の宗教文化の専門研究者の講演と発表がなされた。日本とアメリカの、互いに異なる歴史と社会背景のなかで進められている日本、及び東アジアの文化研究についての報告・発表、討議によって、東アジアの精神史の上で大きな役割を果たした仏教の新たな側面を照射し、成果を共有することができた。

講演、各発表者・タイトル等は下記の通り。

WEDNESDAY, OCTOBER 6, 2010

Welcoming Remarks:

Brian Ruppert, EALC; Elabbas Benmamoun, Director, School of Languages, Cultures, and Linguistics; Akira Tajima, Consul and Director, Japan Information Center, Consulate General of Japan at Chicago

Introductory Discussion of Nara Buddhist Ritual(Lewis, 3rd Floor)

Matsuo Kōichi, National Museum of Japanese History, "Acolytes (Dōji), Hall Acolytes (Dōdōji): Buddhist Rites of Nara and the People Who Support Them" (童子と堂童子—奈良の仏教儀礼と支える人々—)

Kojima Yasuko, Wako University, "The Rites and Tradition of the Tōdaiji Shunri'e (O'Mizutori): The Ritual World of Kami-Buddha Combinatory Relations and the Hachiman Shrine Priests' Protection of Kogannon (東大寺修二会(お水取り)の儀礼と伝承—小観音を守護する八幡宮司、神仏習合の儀礼世界—)

Public Screening and Discussion: Documentary: "The Flower Assembly

<p>Rite (Hana'e-shiki) of Yakushiji: The Ceremony and the People Who Support It” (兼輔寺花名式一行法ハ支スル人々) National Museum of Japanese History, Inter-University Research Corporation, National Institutes for the Humanities, Japan, 2009).</p> <p>Discussants: Director, Matsuo Koichi, 11:30 Ronald Toby, University of Illinois, and David Plath, University of Illinois.</p>	<p>Discussants: Alexander Mayer (Arami), Zong-qi Cai (University of Illinois; Mayer), Brian Ruppert (Jamentz)</p> <p>THURSDAY, OCTOBER 7, 2010</p> <p>Session 2 (Levis, 3rd Floor): The World of the Medieval Preaching Text Tempōrinshō (National Museum of Japanese History Archives) (廿世傳導文獻『聖法輪鈔』 歴博本の世界)</p>
<p>Keynote Addresses (Levis, 3rd Floor)</p> <p>Abe Yasurō, Nagoya University: “Medieval Japanese Liturgical Texts and Performance: The World of Buddhist Ritual as Religious Text” (中世日本の儀礼テクストと芸能—宗教テクストとしての仏教儀礼の世界—)</p>	<p>Makino Atsushi, “On the National Museum of Japanese History Manuscript of the Tempōrinshō” (歴博本『聖法輪鈔』について)</p> <p>Miyoshi Toshinori, Nagoya University, “From the World of the ‘Mikkyō’ Section” (「密教」帖の世界から)</p>
<p>Ryūichi Abé, Harvard University: “Visuality and Power in the Rituals of Mikkyō Patriarchal Portraits”</p>	<p>Abe Milka, Shōwa Women’s University, “From the World of the ‘Good Acts of the Regent-Chancellor House’ Section” (「関白家修善」帖の世界から)</p>
<p>Session 1 (Levis, 3rd Floor): Buddhist Ritual and Arts Across East Asia (東アジアを越える仏教儀礼と芸能)</p> <p>Arami Hiroshi, Hiroshima University: “Research on Dunhuang Manuscript Commentaries on the Eight Fasting Precepts” (敦煌本八關齋戒儀軌寫本研究)</p> <p>Alexander Mayer, University of Illinois: “Forms of Scriptural Practice in Chinese Buddhism”</p>	<p>Session 3 (Levis, 3rd Floor): The Systematization of Religious Knowledge in Japanese Buddhism (日本仏教をめぐる宗教知識の体系化)</p> <p>Koike Junichi, National Museum of Japanese History, “Phases of Religious Knowledge Seen in Shugendo Writings” (修験藏書における宗教知識の位相)</p>
<p>Michael Jamentz, Kyoto University, “Reading the Shōken hyōbyakushū: Clues to the Creation of the Heike monogatari in the Family of Sakuramachi Chūnagon Fujiwara no Shigenori”</p>	<p>Brian Ruppert, University of Illinois: “Networking Monks and the Dissemination of Liturgical Literatures”</p>

Discussant: Ronald Toby, University of Illinois (Koike); Michael Jamentz(Ruppert).

Session 4 (Levis, 3rd Floor): On Aesthetes and Preaching as a Religious

Practice (宗教実践とついでに唱導と芸能者)

Elizabeth Oyler, University of Illinois: "Narrating Space: Geography of the Provinces in Heike monogatari."

Makino Atsushi, Meiji University: "The Tale of the Heike (Heike monogatari) and Buddhist Preaching (Shōdō)" (平家物語と唱導)

Discussant: David Goodman, University of Illinois.

Session 5 (Levis, 3rd Floor): Performance and Medieval Japanese

Buddhism (芸能と日本中世仏教)

Thomas Hare, Princeton University: "Training, Transgression and Wonder in Zeami's Performance Notes"

Ikumi Kannishi, Tufts University: "Performances of the Picture-preaching (etoki) Kumano Nuns: Sacredness and Sexuality"

Chikamoto Kensuke, Tsukuba University: "Preaching and Setsuwa Literature of the Medieval Era: Considering the Writings of Gedatsuō Jōkei" (中世説話文学と唱導—解脱房貞慶の著述をめぐって—)

Discussants: Elizabeth Oyler (Hare), Anne Burkus-Chasson (Kannishi), Brian Ruppert (Chikamoto)

General Discussion of the Implications of the Symposium Findings.

総合討論

◇第三回研究会 三月一日(金) 歴博

〈研究発表〉

ゲストスピーカー 三後明日香(アメリカカールトン大学)「米国

における日本仏教の研究動向から見る中世論義会研究の意

義—宮中最勝講を中心に」

ゲストスピーカー 王媛(一橋大学大学院)「舞楽「迦陵頻」の一

考察—古代仏教儀礼における奏演とイメージ」

小島裕子「金沢文庫本収載「清涼寺供養」について」

三後明日香「米国における日本仏教の研究動向から見る中世論義会研究の意義—宮中最勝講を中心に」は、アメリカの研究者のみならず一般における、日本仏教への関心、注目の様相と、一九六〇年代以降の研究動向について論じた。

教理的側面、特に禅の東洋哲学的な側面への西洋哲学からの関心からはじまった日本仏教への注目は、一九八〇年頃より、政治・社会・制度的な側面へと関心を移すといった、反動ともいえる動向が認められる。

しかしながら、僧侶の教理に対する探求は、古代・中世に不断に続けられており、こうした側面をおろそかにすることはできない。注目されるのは、古代・中世の、国家による仏教行政や、北嶺天台宗と南都法相宗との小乗をめぐる対立的な論争を反映しつつ、教学についての論争が繰り返されたことで、そうした論争の公的な場として南都・北京の年中行事における論義が位置づけられることを提示した。教学と、その方法としての論義と、官僧の昇進制度の整備とは、有機的な関係にあった

のだとする説を、宮中最勝講やそこで行われた論議の内容を具体例として論じた。

さらに、具体例を積み重ねて論証を行うべきであるが、本視点からの研究が進展すれば、大陸・半島を経由して伝来した日本仏教が、半島・大陸とは異なる展開をしつつ、日本の精神文化・伝統文化に大きな影響を与える基盤となった歴史が明らかになってくるものと期待される。

王媛「舞楽「迦陵頻」の一考察―古代仏教儀礼における奏演とイメージ―」は、大陸より伝来し、日本の宮廷舞踊として形成された舞楽の文化史的な考察として、特に舞楽「迦陵頻」に注目し、論じた発表。日本の唐楽の起源となった、唐代の宮廷舞踊「燕楽」にも言及し、大陸のいかなる舞踊が日本舞楽の起源となったのか、より実証的な研究が必要であることを説いた。

舞楽「迦陵頻」は、中国宮廷舞踊中にその名が見えず、日本への伝来には謎が多い。迦陵頻伽は、『阿弥陀経』等の仏典に説かれる、極楽に住むとされる霊鳥である。舞楽「迦陵頻」は、東大寺等、古代寺院の仏教儀礼において、その開会部分における仏への供養舞として「菩薩」等とともに奏演された。こうした奏演の仕方は、仏典に説かれる極楽の世界を、舞台をはじめとする仏前の装置や装束等と、音楽・身体によって具体化した表現・芸術であると認められる。

舞楽「迦陵頻」に相当する舞踊は、現在のところ中国の資料に見出せないが、迦陵頻伽を含む極楽世界描いた絵画や工芸は、中国・日本の両方に数多く残されている。これらに描かれる迦陵頻伽のイメージの比較・検討もあわせて、舞楽「迦陵頻」の形成についても論じた。

古代・中世の日本仏教が、音楽・舞踊等の芸能や芸術の奏演の基盤として大きな役割を果たしたことも、その音楽や舞踊が、大陸・半島の大きな影響を受けていることも周知のところである。しかしながら、その相関関係をあらためて、東アジアの関連資料にも注目し、これらとともに

に位置づけ再考することによって、東アジア世界のなかでの、古代・中世日本の宗教文化の新たな側面を発見し、現出させることができることを印象づけた、今後のさらなる研究の進展が期待される発表であった。

小島裕子共同研究員「金沢文庫本収載「清涼寺供養」について」は、本共同研究において研究の核となる『転法輪鈔』と関連の深い、金沢文庫本収載の「清涼寺供養」について考察した発表。国家仏教、特に後白河院政期の仏教儀礼の性格を考える上での有用性等について論じた。

(松尾恒一執筆)